

9 月
2025/Vo.3

ガバナー月信

Governor's Monthly Letter

2025-2026 年度 ガバナーメッセージ「ロータリアンからはじめましょう」

「奉仕の理念」—カント道徳論と「ケア」の概念からの補足—Ⅱ

国際ロータリー第 2620 地区
2025-26 年度ガバナー
稲葉 雅之（伊東西 RC）

「ケア」と「奉仕」

8 月号から引き続きまして、もう一点、「奉仕」Service について、ささやかな提案をします。私は介護会社を経営し、「介護」つまり「ケア」Care サービスを提供しております。しかし、職業以前に私たちは誰でも「ケア」にかかわっています。私たちは子供を世話 care し、成長を手助けし、独り立ちすることに喜びを感じます。また、病者や高齢者を看病 care したり、介護 care したりします。このような営みに共通して存在する考え方や感じ方とは何でしょうか。

私の提案とは、「奉仕」という概念を、「ケア」という概念によって置き換えるとまでは言いませんが、補足できるのではないかと、いう提案です。実は、倫理学史には、カントの道徳論だけでなく、「ケアの倫理学」という比較的新しい学説があります。「ケア」という営みを、道徳的問題の解決に導入しようとする考え方は、ここでそのエッセンスのいくつかを紹介して、「奉仕」概念を補足してみたいと思います。主にキャロル・ギリガンとネル・ノディングスから学びます。

第一に、「ケア」は、人間を、バラバラの独立した人格としてではなく、密接な人間関係 relationship や関わり connection の中に生き、相互に依存し depend on たり応答し respond to 合ったりする存在と見なします。ですから、私たちは誰かに依存していますし、同時にまた、誰に対しても無関心ではられません。ここから世話をする「責任」responsibility が生じます。家族や隣人であれば当然、遠い地域の人々にも、程度の差こそあれ私たちは心配し世話をする責任を感じます。「世話」care という一見卑近な営みと思われるものが、実は国境を超えた広がりを持っていることがわかります。もちろんロータリーの「奉仕」も国境を越えています。

「誰もが他の人から応えてもらえ、仲間としてみなされて、誰ひとりとり残されたり傷つけられたりしてはならない」（キャロル・ギリガン『もうひとつの声』）。

第二に、「ケア」は世話をする相手のニーズを敏感に responsive 汲み取ろうとします。赤ちゃんが泣いています。私は何かをしなければならないと感じますが、何をすればよいのでしょうか。赤ちゃんはまだ話せませんから、何を不快に感じているのか、どんなニーズを訴えているのか、すぐにはわかりません。予断なく試行錯誤を繰り返して、ニーズを察知しなければなりません。認知症の高齢者に対しても同様の努力が必要とされます。また、相手のニーズを察知する際、相手が置かれている「現実」reality を理解しなければなりません。奉仕する自分の現実ではなく、あくまで相手の現実をです。相手の現実やニーズを敏感に感じ取れなければ、「奉仕」は効果的に機能しません。

（次ページへ続く）



8月5日焼津南 RC 公式訪問より

(次ページより続き)

そこで必要になってくる態度が、相手を受け容れ receiving、共に感じる feeling with こと、つまり「受容的な共感」receptive sympathy です。「そのような現実に置かれたら私は何を感じるだろうか」という共感と、「そのような現実に置かれている相手は何を感じているのだろうか」という共感の違いに注意してください。焦点は、ケアすべき相手の感じ方や思いであり、私がどう感じるかではありません。先入見なく相手の感じ方や思いを受け入れ、それらを共にすること、これが受容的な共感です。ロータリアンの「奉仕」は、よかれと思って相手に押し付けるものではありません。奉仕される相手の感じ方や思いに身を寄せて行われるものです。

第三に、子育てを例にとればわかりますが、「ケア」は長期的展望に立って行われるものです。短期的で一回限りのものではありません。持続的、継続的な働き掛けであり、時にはニーズの変化に応じて、ケアのあり方も変更しなければなりません。ロータリアンの「奉仕」も同様です。長期的展望に立って、ニーズの変化を察知し奉仕のあり方を変更しなければ、奉仕は有効性を失います。「奉仕」は、奉仕が実を結ぶまでを見届けなければなりません。そして、親が子供たちの成長に喜びを感じるように、奉仕もまたそれが成功裏に達成されるなら、大きな喜びをもたらすことでしょう。私たちはここで「奉仕の理念」のもう一つのモットー（「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」One Profits Most Who Serves Best）を理解します。「奉仕」は、奉仕を受ける人々の健全な成長や健康の回復という成果によって、「喜び」という「報いを得る」profit のです。

最後に、もう一つ付け加えさせて下さい。子育てにせよ介護にせよ、時としてケアする人は、大きな負担を背負うことに直面します。しかし、「ケア」は自己犠牲を命じるものではありません。つまり、「ケア」はケアする人をもケアすることの必要を説きます。ですから、「奉仕」に熱心に取り組んでいるロータリアンがいて、その人がその熱心さ故に負担や悩みを抱え込んでいるなら、仲間のロータリアンはその事情に鋭敏に気づき、その人が抱え込んでいる負担を分かち担わなければなりません。このことはロータリアン同士の助け合いとしての「クラブ奉仕」に由来するでしょう。

以上のように、カントの道徳論と「ケア」の考え方によって、「奉仕」の理念を補足してみました。私たちがクラブの活動の中で最も大切に「奉仕」の理解や活性化に、わずかながらでも寄与できれば幸いです。



静岡県知事表敬訪問

9月は基本的教育と識字率向上月間&日本独自の「ロータリーの友月間」

9月は基本的教育と識字率向上月間、そして日本独自の「ロータリーの友月間」です。RIのリソースを活用して、基本的教育と識字率向上への理解を深めましょう。

<https://www.rotary.org/ja/our-causes/supporting-education>（教育の支援ページ）

また、日本独自の「ロータリーの友月間」です。下記資料をクラブで役立てていただければ幸いです。

2025-26 年度版「ロータリーの友月間用パワーポイント」

<https://www.rotary-no-tomo.jp/tmp/info/2025tomomonthl.pptx>

2025-26 年度『ロータリーの友』手引書

https://www.rotary-no-tomo.jp/tmp/info/tomo_tebiki.pdf

毎月届くけど、知っているようで知らない『ロータリーの友』。創刊の経緯から現在に至るまでの歩みをまとめられています。『友』と併せてご一読ください。



ホスト校を伊豆総合高校に第51回インターアクト年次大会

第51回インターアクト年次大会を8月3日(日)、大会テーマ「active food culture ～新しい商品開発への道～」のもと、伊豆総合高等学校で開き、インターアクトクラブの生徒88名、顧問先生19名、提唱ロータリークラブロータリアン40名、稲葉雅之ガバナーをはじめロータリーの地区役員12名が参加しました。年次大会は、交流を広め共同学習、情報交換をして今後のインターアクト活動に反映することを目的としています。開会式ではホスト校の所康俊校長、スポンサー RC の伊豆中央 RC 小野憲会長から温かい歓迎のご挨拶をいただきました。来賓挨拶では菊地豊伊豆市長より平和、多様性の時代、伊豆の食についてのお話をいただきました。稲葉ガバナーはロータリー活動の究極を「鬼滅の刃」に例えられ、高校生に分かりやすく話をしてくださいました。小澤邦比呂ロータリープログラム委員長は大切なことを進める上での準備の大切さを、イチロー氏の行動に例えてお話くださったほか、聖隷クリストファー高校甲子園出場のお祝いを述べられました。午後からは「グループワークに向けた商品開発、食について」伊豆中央 RC 浅田藤二様の講演や、「それぞれの地域の食材を入れたレシピを考えよう」をテーマにグループ毎に発表しました。

素晴らしい「インターアクト年次大会」を実施してくださったホスト校伊豆総合高等学校 IAC、顧問先生、スポンサー伊豆中央 RC の皆さんに感謝申し上げます。



青少年交換研修



青少年交換研修を8月24日(日)、静岡商工会議所で開きました。2024-25年度にフィンランドへ派遣された淡路健太郎さんが帰国報告を行ったほか、今年度の受入学生 JULIE さん(受入クラブ: 甲府南 RC)と BENCE さん(受入クラブ: 藤枝南 RC)がスピーチを行いました。

